チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 123 2022 年 10 月 21 日発行

*** 2023 年チェルノブイリ救援カレンダー お申込み受付中 **

КАЛЕНДАРЬ НА 2023 ГОД (37 ЛЕТ ЧЕРНОБЫЛЬСКОЙ АВАРИИ)



2023 チェルノブイリ37周年救援カレンダー

制作のチェルノブイリ子どもま

◆カレンダーの表紙 2010 年の保養に参加したウクライナの子どもたち

カレンダーの収益は、チェルノブイリ と福島の原発事故により被災した子ども たちの救援金にあてられます。お申し込 み方法など詳細は16頁をご覧ください。



◆ベラルーシ 2022 年夏の保養に参加したさまざまな病気を抱える子どもたち(写真右)と保養に参加した家族(上)



~~ 本号の目次 ~~

p.2~5 ウクライナ緊急支援の報告

p.6 ウクライナ 「内分泌研究所」

p.7 NGO「チェルノブイリの子どもたちの生存」

p.8~9 「オヴルチ子ども芸術アカデミー/

ナロジチ訪問 現地団体からの報告

 $p.10\sim11$ ベラルーシ・チェルノブイリ被害者家族の保養

p.12~13 ベラルーシ・放射能汚染地の

病気の子どもたちのための保養

p.14 ベラルーシからのメッセージ

p.15 311 子ども甲状腺がん裁判

p.16 2023 年救援カレンダー

p.17 募金·救援状況

p.18 事務局から

ウクライナ緊急支援の報告

2月24日にウクライナにロシア軍が侵攻してから間もなく8か月になろうとしています。国外へ避難した人、国内に留まっている人など、それぞれ事情はさまざまです。戦争の終わりが見えず、チェルノブイリ事故による健康被害を抱える人たちは、自分や家族の治療もままならず、大きな不安の中にあります。みなさまから寄せられた<ウクライナ緊急支援>は、そのような人たちのために役立てられています。ここで紹介するオリガさん、ニコライさん、ナージャさんの3人はみな、子どもの頃に甲状腺の手術を受け、その後、子ども基金の保養プロジェクトに参加していました。子ども基金は今後もこのような人々への支援を継続していきます。

オリガ (35 歳) ジトーミル

ご存知のように、わが国では恐ろしい戦争が進行中です。人々は命を落とし、町は破壊されています。私は、毎日死を恐れなければならないような状況で生活するようになるなどとは、思ってもいませんでした。私たちの町は今のところ比較的幸運です。戦争が始まってから、私たちの町は一度爆撃を受けました。3月16日でした。しかし、これは最も恐ろしい思い出です。私たちの家はまるで紙製のように揺れました。私は恐怖で言葉が出なくなりました。しばらくしてからも普通に声が出せないほどでした。死に備えることは不可能です。死を恐れないことは不可能です。

毎日、私たちの小さな町に若者たちの遺体が埋葬のために運ばれています。酷いことです。終わりのない悪夢です。毎晩、耐えがたい警報音で何度も目が覚めます。不安…。この言葉は、戦争の始まりとともに私たちの日常生活に入り込みました。

私はできるだけ気をしっかり持ち、いつものように仕事をして、日常のことをしながら気を紛らわせ、気がおかしくならないようにしています。ミサイルがどこに落ちるかによって、自分の命と愛する人の命がかかっていることを実感するのはたまらないからです。それはただ耐え難いです。

そして、この悪夢のような状況の中で、夫は深刻で複雑な病気と診断されました。6月に新型コロナウイルスのワクチン接種後、鼻や口の中からの出血が止まらなくなり、全身に血種が現れ、血液中の血小板が全く検出されず、血液科の集中治療室に入院しました。3週間入院し血漿輸血と点滴をしたところ、最低限な血小板のレベルになりました。そのため、自宅での投薬治療になりました。リウマチ専門医は、夫は重度の全身性自己免疫疾患であると診断しました。今後、最低でも1年は薬を飲まなければなりません。血小板数が50未満の場合は、再度病院に行き、輸血を行う必要があります。

私はこれまで自分の家族のために誰かに援助を求めたことはありません。しかし現在、戦争が起きている中で夫が重病を患い、経済的に困難な状況に陥っています。夫が毎日服用しなければならない薬は非常に高価です。これらは ひと月あたり数千フリヴニャ【ウクライナの通貨単位】です。これまでのところ、なんとか苦労しながらやりくりしています。しかし、私と彼の給料では必要なすべての薬を購入するのに十分ではありません。お金をお願いするのは私にとってはとても恥ずかしいことです。しかし、私は夫を救うためなら何でもできることをしたいのです。

私の健康状態はあまり良くありません。戦争が始まったことにより、町のすべての医療施設が数か月間閉鎖されました。 そのため、私は必要な時期に検査を受けることができませんでした。予定より遅くなってしまい、検査結果はとても悪いことがわかりました。今、私はホルモンの量を増やして1か月間服用しています。戦争が始まったばかりの頃、チロキシン【甲状腺ホルモン剤】を購入するのは困難でした。どこにいっても売っていませんでした。でも今は薬局で販売しています。

(8月21日、23日)



※支援金を受け取ったオリガさんからの返信。

「薬を購入することができました。このような困難な時に、ご支援くださりありがとうございます。決して忘れません。私は夫のそばにいるように努めています。今、夫が本当に私を必要としているからです。私たちは闘います。」

(9月5日)

ニコライ(37歳)チェルニヒウ(チェルニゴフ)

ここはベラルーシとロシアとの国境の近くです。 戦車や戦闘機で四方八方から攻撃を受けている間、 私たちはずっと地下で過ごしていました。町は占領 され、完全に遮断されました。すべての橋が破壊さ れました。病院はみな砲撃により被害を受けました。 非常に恐ろしい日々でした。水、電気、通信. イン ターネットもなく、食糧に関してもとても大変で. 要するに 何も良いことはありませんでした。もう 自分たちは生き残ることができないと思っていまし た。毎日神に祈りました。向かいの家にミサイルが 飛んできて、私たちの家も、屋根、窓、壁に被害を 受けました。また、原発が攻撃されるのではないか と恐れています。

今は水や電気、通信は復旧しました。薬局も、店 も銀行は再開し始めました。しかし食料品も医薬品 もとても値上がりしました。私たちの国の通貨であ るフリヴニャは大幅に下落しました。ドルとユーロ は非常に高くなりました。為替レートの関係でみな 値上がりしています。

母は両股関節の手術をしていて杖をついて歩いて います。ほかにもたくさんの病気があります。自分 の健康状態はよくありません。慢性的な高血圧症で、 心臓と手足、背中の痛みがあります。私は年金で生 活しています。年金はとても少なく、これまでもや っとのことで生活していましたが、今は全く足りま せん。母もとても少ない年金で暮らしています。薬 を買うと、あとは少し食品が買えるくらいしか残り ません。これから出費のかさむ冬が待っています。 公共料金を払わなければなりませんが、それらも値 上がりしました。仕事を探したいのですが、ここで はほぼ肉体労働の仕事しかなく、自分の健康状態で はそのような仕事に就くことができません。この先 一体、どうやって生きていけばいいのかわかりませ ん。以前も生活は大変でしたが、いまは戦争のため にさらに大変です。頭上をミサイルが飛んでいます。 毎日とても辛く恐ろしく、泣きたくなります。

(8月22日、23日)



* * *

母と自分のために薬を買うことができました。この困難な時に私たちを助けてくれたことに心から感謝します。 (9月9日) 写真左下

* * *

こちらはとても寒くなりました。今日は雨が降っていて、寒いです。冬の暖房のことを心配しています。寒さが迫っている中、再び電気や水が途絶えてしまったらどうなってしまうのかと、みな不安を感じています。そして冬までに家の屋根、窓、垣根の修理をしなければなりません。ホルモンの影響なのか、自分の体調はあまりよくありません。ご支援をほんとうにありがとうございます。母からもよろしくとのことです。 (9月13日)

ナージャ(38歳) ドニプロ(ドニエプル)

1998 年にベラルーシの「ナデジダ」での子ども基金の保養プロジェクトに参加し、それから9年連続で、ウクライナの「ユージャンカ」【かつて子ども基金が保養プロジェクトを開催した施設】での保養に参加しました。いま私は環境検査官として働いています。既婚で、子どもはまだいませんが、いつかは子どもがほしいと思っています。

ナデジダとユージャンカで過ごした日々を懐かしく思い出します。その時のことはずっと私の記憶に残っています。このような保養に参加できたことを本当に感謝しています。当時の写真や、日本のボランティアの方から送ってもらった手紙を今でも大切に持っています。

現在、ご承知のとおり、私たちの国では戦争が進行中です。ミサイルが飛ぶこともあります。しかし、私たちは耐え抜きます!大事なことは、あきらめないことです。

子ども基金からのご支援に対してお礼を申し上げます。おかげで検査を受け、今後の治療を進められるようになりました。ご存知のように、私たち(甲状腺手術を受けた人たち)の健康状態はあまり良くなく、健康を保つためには、常に薬やビタミンを摂取する必要があります。そのため、みなさんからの支援金は、すべて検査と薬の購入に費やされました。残念ながら、ウクライナでは検査費用は安くはありません。日本のみなさんがお元気で過ごされますようお祈りします。 (9月9日)

<前号の基金ニュースで紹介した人たちのその後の様子です。>

避難先の町からキエフ(キーウ)の自宅に戻って いたインナさんはその後ドイツに避難しました。

◆8月1日

数日前にドイツに着きました。ウクライナは緊張 状態が続いていて、政治家や軍事関係者たちは、ま だ当分戦争は終わらないし、さらに困難な状況にな ると言っています。毎日警報が鳴り、命の危険を感 じました。ウクライナでは 18~60 歳の男性は出国で きないと思っていましたが、実は、障害のある妻の いる男性は出国できるということを知り、夫は出国 を決心しました。数日間のうちに慌てて準備をして、 急に家を出ることになりました。こんなことになる とは思っていなかったので、まだ私は茫然としてい ます。母をキエフに残してきたのがとても辛いです。 キエフにいる妹が母を助けてくれることが救いです。

いま私たちのいるドイツ北部のこの町には、夫の 親類がいます。今のところは彼らの家で暮らしてい ます。これから一体どうなっていくのか、どこに住 むのか、まったくわかりません。わかったのは、こ の町にはウクライナから避難してきた人がとても多 いということです。そのため避難民たちの住居の問 題が起きています。言葉もわからない国で暮らして いくのは、とても大変なことです。これは娘にとっ ても大きなストレスです。

◆8月18日

私たちはドイツの一時滞在の登録をしました。ほかの書類の準備もしているところです。まだ医療保険はなく、また何の経済援助もありません。いろいろな手続きをするのにとても時間がかかります。来週には娘の学校の手続きをします。彼女はあまり気が進まず、それよりウクライナにいる友だちのことをとても恋しがっています。私たちはいまも親類の家に住んでいます。一部屋のアパートに7人で暮らしています。



◆8月25日

昨日はウクライナの独立記念日でした。私と娘は ウクライナの民族衣装を着て、家族で町を歩きまし た。町では小さな集会があり、多くのウクライナか らの避難民が来ていました。

一方、ウクライナでは戦争が続いています。毎日ニュースを見ては泣きたくなります…。私たちが夏に子どもたちと過ごした大好きな海辺の町がロシア軍に占領されているのは残念です(※)。そこで過ごした楽しい日々が懐かしいです。私は昨年の保養で親しくなった人たちと連絡を取り合っています。クラマトルスク(ドネツク州)のヴィクトリアさん、ミコライウ(ニコラエフ)のヴィターリさん。これらの都市はミサイル攻撃されています。マリウポリ、ドネツクにも友人がいます!

どれだけ多くの人の命が絶たれ、傷を負ったことでしょう。子どもたちは、楽しいはずの子ども時代も、教育の機会も奪われました。

私たちは毎日、戦争の終結を祈っています。

(※昨年子ども基金が保養プロジェクトを行ったヘルソン州の海辺の町のこと。インナさんは子どもたちの引率者として参加しました。)

◆8 月 26 日

娘は今日初めて、ウクライナの避難民の子どものためのドイツ語教室に行きました。大人用のドイツ語教室にはやっと登録することができました。言葉がわからないと生活も仕事もできません。

◆9月11日

8 月に提出した書類がまだ処理されず、私たちは相変わらず何の支援もないまま、医療保険もなく、まだ親類の部屋で暮らしています。あまりに避難民が多すぎるから、というのはわかります。もうヨーロッパの人たちはウクライナの避難民に疲れてしまったのではないでしょうか…。

◆10月10日

やっと難民手当が支給されました。食料品や生活必需品を買うことができます。でも住居の問題はまだ残ったままです。医師の処方箋なしで薬を買えないことにも困っています。医師にかかるには予約が必要で、それには何数週間、何か月と待たなければならないのです。

インナさん(中央)と家族 ドイツにて 8月25日撮影

子ども基金が支援しているナロジチ (ジトーミル州) の家族 ガリーナさんより

◆9月2日

子どもたちのことを忘れずに、心配してくれてありがとうございます。生活は大変になっていますが、私たちが生きていることをうれしく思います!!! 良い方向へ変わっていくことをとても願っています。

平和を祈っています。世界中の平和を。戦争の音はとても恐ろしい…。家族や親しい人たちが撃たれ、亡くなっていく様を目の当たりにして、人々は恐れと怒りにうち震えています。この感情はこれから何年もの間、消えることはないでしょう。

新学期、オンライン授業が始まりました。昼も夜 もサイレンが頻繁に鳴っています。みんなの平和を 祈ります。

ウクライナの NGO「チェルノブイリの子どもたち の生存」より

◆9月7日

先週、ナロジチの近くの森でロシアの地雷により 森林官が亡くなりました。以前、子ども基金の里親 支援を受けていたマクシム君の父親です。(※)

ウクライナのキエフ(キーウ)からチェコに避難していたオクサーナさんはその後イギリスへ。

◆8月1日、3日

私はウクライナに2週間ほど戻っていました。キエフの自分の家と、ジトーミル州の実家に行き、必要な荷物を持ち帰ってきました。

今のキエフは、2 月・3 月のときのような恐ろしさはありません。爆発音は聞こえません。でもそこに住むことは依然として危険だと思っています。私の住んでいた家は無事でした。26 階建てのアパートで、多くの住民が戻ってきていました。町は落ち着いてきましたが、それでも安全ではありません。軍隊、軍事装備、武器がたくさんあり、恐ろしいです。いつでも国の東部と同じようになる可能性があることを想像させます。

砲弾は毎日さまざまなウクライナの都市に落とされます。戦闘は国の東部と南部に集中しています。 ウクライナでは、現在、どこの都市も安全ではありません。しかし人々は次第に戻ってきています。

私の家族はみな元気です。実家の父も無事です。

※10 月 10 日、ポーランドへ避難しているマクシム君家族へ緊急支援金を送金しました。

母は8月末にはウクライナの家に戻る予定ですくこの時点ではチェコに避難中>。そこは軍事施設や産業施設のない小さな町です。サイレンは断続的に鳴りますが、大体は静かです。すべてがうまくいくことを願っています。

私は、姉と甥と一緒に、今避難しているチェコからイギリスへ行く予定です。両親も、私たちがイギリスに行った方がよいと思っています。

初めは、新型コロナのために子どもたちには通常の教育が行われませんでした。そして今は、さらに戦争という事態です。ウクライナでは通常の教育は行われないでしょう。頻繁にサイレンが鳴り響き、防空壕に逃げる必要があります。

間もなく7歳になる甥に、良い教育を受けさせたいと思っています。イギリスへ行くにはいろいろ書類をそろえるのに大変ですが、きっとうまくいくことを信じています。本当に平和に暮らしたいと思っています。ミサイルが家に飛び込んでくるかもしれない、などと恐れることのないように。ウクライナで起きていることは恐ろしいです。ブーチャ、イルペニ(イルピニ)で起こったことはひどいです。人々は拷問され、その後殺されました。

当たり前だと思っていたことが、なんて貴重なことだったのかと、それがなくなってから気づいたのは、残念です。

※オクサーナさんは姉、甥とともに現在(10月)イギリスに避難しています。6か月間は一般の家庭に受け入れられるウクライナ支援プログラムがあり、その後は自立しなければならないそうです。

スウェーデンのNGO "star of hope"から 9月20日

「スウェーデンで5か月間避難していたウクライナの親子が家に戻る決心をしたため、自宅のあるジトーミルまで送り届けました。交通費はすべてstar of hope が負担しています。母親タチヤナさんは、子どもの頃に甲状腺手術を受けた後、ベラルーシの「ナデジダ」で行われたあなた方の団体の保養プロジェクトに参加し、そこで真理さん(子ども基金事務局長)に会っているそうです。ほかにも、当団体が支援をしている2人の男性とキエフで会いました。この旅で撮影した写真やビデオを何らかの形にまとめる予定です。子ども基金と情報を共有します。」

ウクライナ 内分泌研究所

ウクライナの内分泌研究所では、甲状腺の患者の手術と治療を行っています。子ども基金はこれまで、医薬品や医療機器の支援を行っています。昨年(2021年)12月には甲状腺ホルモン剤の購入費用を支援しました。さらに今年5月、内分泌研究所からの要望により薬の購入費用の追加支援(8,000ドル)を行いました。薬の購入の手続きはNGO「チェルノブイリの子どもたちの生存」が行い、7月末に内分泌研究所に届けられました。

~*~*~*~*~*~*~*~*~*~**

チェルノブイリ子ども基金のみなさまへ

私たちの国の戦争(ロシアのウクライナ侵攻) という非常に困難な時期に、大変重要で不可欠な ご支援をいただいたことに感謝いたします。

2022 年半ばに再度いただいたご支援により、 エウチロクス〔甲状腺ホルモン剤〕3,310 箱(1 箱100錠入り)を購入しました。

この薬は甲状腺のさまざまな病状を持つ患者の 治療に使用されます。患者たちは生涯にわたり毎 日服用する必要があります。甲状腺の手術を受け たほとんどの患者は、放射性ヨウ素治療を受け、 エウチロクスによる治療と、内分泌研究所での定 期検査を受けています。

2022 年初めに基金の資金で購入したエウチロクス 100mkg 3,254 箱のうち、これまでに1,061 人の甲状腺の患者が受け取っています(※)。

私たちは、この薬を生涯にわたり必要とする患者たちとともに皆さんに感謝し、今後も協力関係が続くことを願っています。

2022年8月23日

所長 N.D.トロンコ



写真手前:ナターリヤ(37歳)キエフ州ポレスコエ地区在住。2013年(28歳の時)に甲状腺がんの手術、その後は放射性ヨウ素治療を受け、エウチロクスを服用しています。

◆ヘルソン州出身で、現在キエフに暮らすパーヴェルさん(39 歳)からは、次のようなお礼のメッセージを受け取っています。

「1996 年(13 歳の時)に甲状腺がんと診断され、内分泌研究所で手術を受けました。リハビリ期間の後、チェルノブイリ子ども基金の保養プロジェクトに参加しました。保養は私の体調に良い影響がありました。手術後から今まで、私にとって不可欠なエウチロクスを受け取っています。私のような甲状腺がん患者に資金を提供し、支援してくださっているみなさまに感謝しています。」

その後、NGO「チェルノブイリ子どもたちの生存」ザクレフスキーさんが本人に直接連絡をとったところ、パーヴェルさんは子ども基金の招待により、1997年にベラルーシの「ナデジダ」で、翌98年にはウクライナの「ユージャンカ」で保養をしていたことがわかりました。特に「ナデジダ」の保養の印象が強く残っているそうです。子ども基金の97年9月号のニュースレターには、次のような彼の手紙が紹介されていました。「(日本人ボランティアが開いた)陶芸教室、料

理教室に参加したのはとても楽しかったです。僕の3か月の薬代は両親の1年分の給料くらい高いです」 手術後から現在ま

手術後から現在まで25年もの間、定期検査と治療に通っている内分泌研究所の医師について、とても温かい言葉で語っていたということです。



※9月28日には、「1,171人の患者が薬を受け取った」 と連絡がありました。

6

ウクライナ 慈善団体「チェルノブイリの子どもたちの生存」

子ども基金は長年、ウクライナの NGO「チェルノブイリの子どもたちの生存」と協力し、ウクライナの放射能汚染地区の子どもの保養や里子支援を行っています。その代表を務めていたリュドミーラ・ザクレフスカヤさんが 7 月 11 日にお亡くなりになりました。夫ウラジーミル・ザクレフスキーさんからの突然の悲しい知らせに衝撃を受けました。

以前からリウマチのために足を引きずるように歩いていましたが、ほかにも病気にかかっていたことは、私たちには何も話しませんでした。最後に声を聴いたのは3月29日でした。チェルノブイリ原発が攻撃された、というメールを最後に、メールの返信が途絶えていたので、とても心配し、何度か電話をしたところやっとつながりました。「どこにも避難せず、家族でずっとキエフの家にいる。連絡しようと思っていたけれど、日々起きていることが恐ろしくてそれどころではなかった。落ち着いたら必ず連絡しようと思っていた」と話していました。普段の快活そうな声ではなく、震えるような声でしたので、それは戦争の恐怖によるものと思いました。しかし病気のせいもあったのかもしれない、と後になって思いました。「また必ず会いましょう!」と言って電話を切りましたが、それは叶いませんでした。長い間チェルノブイリの子どもたちの救援のために多大な力を尽くされたことに敬意を表し、心よりご冥福をお祈りいたします。

(事務局長 佐々木真理)

~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~**

- ■リュドミーラは 7 月 11 日にこの世を去りました。 数年間自分の病気と勇敢に闘ってきましたが、戦争 が死を早めました。団体の活動は継続していきます。 (7月20日)
- ■ナロジチとオヴルチの里子の家族の銀行口座に直接送金する手続きを始めています。これがなかなか進まない理由は、銀行がキエフの他の機関と同様、絶え間ない空襲警報のために長時間の中断を余儀なくされているからです。さらに国やその他の機関で働く多くの女性が子どもを連れてウクライナを離れたため、今は熟練度の低い労働者に取って代わられているからです。(8月24日)
- ■「チェルノブイリの子どもたちの生存」は先週、 私ウラジーミル・ザクレフスキーを新しい代表とし ました。私のアシスタントはヴィターリ(1984 年プ リピャチ生まれ、事故後避難。両親はナロジチ出 身)と、亡きリュドミーラと共に団体で 30 年間働 いてきたリューバです。現時点で、基金の責任者の

いてきたリューバです。現時点で、基金の責任者の

2012 年 6 月 ジトーミル州オヴルチを訪問した時の様子。向かって右端が子ども基金の佐々木、隣がリュドミーラさん、中央はオヴルチ子ども芸術アカデミーの校長。

変更が政府機関で正式に登録されています。次に銀行関係の名義変更の手続きが必要です。その後、子ども基金のリストに従って、ナロジチとオヴルチの里子たちへの送金問題を解決します(※)。(8月30日) ※里子への送金は10月10日に無事完了。

~*~*~*~*~*~*~*~*~*

新代表のザクレフスキーさんは、かつてチェルノブイリ原発で建設と事故処理に 1989 年まで関わりました。「チェルノブイリには別れを告げたつもりだったが、結局生涯関わることになりそうだ」とおっしゃっています。

10月10日朝に起きたキエフ市街中心部への攻撃では、団体の事務所近くにもミサイルが着弾しました。現場は地下鉄駅と事務所の間にあり、ザクレフスキーさん自身、前日にも2度歩いたばかりだったということです。幸い関係者に被害はありませんでしたが、たまたま近くにいた人々が犠牲になり、文化施設、民間施設が破壊されました。



向かって左から、ウラジーミルさん、リューバさん、ヴィターリさん。2022年9月。

その後、ザクレフスキーさんからは、「内分泌研究所」(6 頁参照)に関する情報と、オヴルチの「子ども芸術アカデミー」、さらにナロジチ訪問の報告が送られてきました。子ども基金はこれからも、チェルノブイリ事故による放射能と戦争の二重の被害を受けているオヴルチやナロジチの子どもたちへの支援を行っていきます。

~*~*~*~*~*~*~*~*

●オヴルチ「子ども芸術アカデミー」

校長のニコライ・クリモヴィチさんは、ここ数年、チェルノブイリ子ども基金の保養プロジェクトの引率者として参加してきた人です。戦争が始まり、オヴルチからは 60~70%の子どもが避難しました。秋になり、90%以上の子どもが戻ってきています。この学校では 9 月から教室を再開しました。下の写真は 9 月 19 日の授業の様子。子どもたちは色付けされた藁素材を用いた作品(右の写真)を作っています。

生徒たちはとても喜んで教室に通っています。 町に住んでいる子だけでなく、近くの村から通っている子もいます。その他、ドネツク州の町からオヴルチに避難してきた2人の女の子も通っています。

教室のある建物の地下には、10年前に私たちの団体「チェルノブイリ子どもたちの生存」の援助で作られた体育館があります。そこは防空壕として使用できます。現在子どもたちは非常に熱心に教室に参加しています。戦争が始まって以来、オヴルチの学校は閉鎖されていました。そして今子どもたちはみなオンラインで授業を受けています。そのためこの教室で友達と会えることをとても喜んでいるそうです。この半月の間、子どもたちが空襲警報により地下に避難したのは2回だけでした。秋になり、春と夏に比べてオヴルチでの空襲警報ははるかに少なくなりました。ベラルー



シ方面からの空襲の脅威は、大幅に減少しました。 そこから飛行機がわずか2分でオヴルチに飛んで きます。恐らく我々の空の防衛はうまく機能して いるのでしょう。ニコライさんによると、生徒た ちの半数の親は軍隊にいるそうです。

現在、彼が授業で使用しているのは、12 年前に購入した古いコンピュータです。新しいコンピュータを使用して、生徒たちに芸術的な作品を見せたり、美術館へのオンライン旅行等を行いたいと思っています。

『2023 年チェルノブイリ救援カレンダー』には、昨年の保養に参加したオヴルチの子どもたちの写真も掲載されています。この教室に通っている子どもたちもいます。

<7 月の写真>ガラス絵の教室に通っている子どもたちです。アリーナ(壁に背を向けて座っている女の子)は、母親と一緒にオヴルチから少し離れた村に避難しています。自分の作品を持っていき、作業を続けています。ローマ(赤い ↑シャツの男の子)はオヴルチにいますが、両親が息子を通学させるのを恐れているため、教室を休んでいます。

<8 月の写真>中央で背負われている男の子は、 母親と一緒にスペインに避難しています。 前列 右端 2 人の女の子はオヴルチにいて、教室に通っています。



●ナロジチ訪問

9月28日、当基金のヴィターリとともに、ナロジチ地区を訪れました。ここは1986年のチェルノブイリ事故で、そして2022年のロシア・ウクライナ戦争で被害を受けました。

この地区には戦前、9 つの幼稚園に 227 人の子どもが通い、9 つの学校に 866 人の子どもが通っていました。これらの学校の中で最大のナロジチ・ギムナジウムには、387 人の生徒が通っていました。今回の戦争により 7 つの学校と 5 つの幼稚園が、空爆と砲撃によってさまざまな被害を受けました。建物の屋根、窓やドア、倉庫などの建物がほとんど破壊されました。バザール村(ナロジチ地区で 2 番目に人口の多い村)で最も被害を受けた学校と幼稚園では、屋根と 70 の窓がひどく損傷しました。

キエフからナロジチまでは約200kmで、車で4時間かかりました。途中のすべての橋はまだ破壊されたままです。それらの代わりに、小さな川に一時的な浮橋と土の堤防が設置されていました。

ナロジチに向かう途中、バザール村に立ち寄りました。学校と幼稚園の建物では、損傷した窓はすべて新しいものに交換されていました。屋根も完全に修理されています。これらの建物が砲撃されたという事実は、壁の近くに古い窓の破片とスレートの破片が散らばっていることでわかります。学校と幼稚園の建物には、教師、生徒、子どもたちの姿は見られませんでした。

ナロジチへの道すがら、破壊された橋の様子と 建物を写真に撮ろうとしました。2011 年に真理 さん(子ども基金事務局長)と一緒にナロジチを 訪問した時、この橋を渡りました。戦争の最中、 人々がどのような暮らしをしているのか、あなた に見せようと思いました。しかし私たちはすアの に見せようと思いました。しかし私たちはすアの に見せようと思いました。しかし私たちはすアの に見せようと思いました。 に見せようと思いました。 に見せようと思いました。 しかし私たちは で引き止められました。 サロジチで撮影 いの通りで、私たちは長い間尋問を受け、携帯深く がんられました。同時に、ナロジチで撮影したす べての写真を削除させられました。 時間話し合った末、解放されました。

この後私たちは、ナロジチ教育局の責任者であ るコノプスキー氏と会いました。ナロジチ・ギム ナジウムの下級生を除いて、地区内のすべての学 校はオンラインで授業が行われているそうです。 空襲警報が鳴った時に避難する場所が足りないた めとのことです。現在学校に在籍している生徒の 人数と、戦争の開始後にナロジチから避難した人 数は正確にはわからないとのことです。ナロジ チ・ギムナジウムの教師で、子ども基金の保養プ ロジェクトの引率者として何度か参加したアーラ さんが現在ドイツにいることを彼から聞きました。 さらに、学校と幼稚園では、屋根、正面玄関、ド アの修理を最も必要としていると言いました。学 校はまた、オフィス機器、特に国境地帯での特別 な戒厳令の条件下でオンライン授業を実施するた めのカメラ付きのラップトップ型パソコンまたは タブレットを非常に必要としているということで

病院に関しては、ナロジチに向かう途中、バザール村の外来患者用の診療所に立ち寄りました。 そこはほとんど戦争の被害を受けていませんでした。天井が少し破損していました。そこには私たちが会った医師を除いて、患者や他の医師の姿はありませんでした。

真理さんもよくご存知の小児科医のエレーナさん(14 頁参照)が副院長として勤務している病院へは、時間が足りず訪問することができませんでした。(9月28日)



ベラルーシ チェルノブイリ被害者家族の保養

昨年までは、両親のどちらかが甲状腺手術を受けた家族を保養に招待してきました。今年は昨年までと同様の甲状腺手術後の親とその子どもたち4家族に加え、現地団体の要望を取り入れ、小児がんの子どもとその親たち4家族を招待しました。

■場所:子どもリハビリ・健康回復センター 「ナデジダ(希望)」ベラルーシ・ミンスク州

■期間:2022年7月9日~22日(14日間)

■参加者:8家族22人:大人11人、子ども11人(ゴメリ市、レチッツァ市、ドーブルシ市)

参加者たちは保養期間中、各人の体調に合わせた治療を受けました。心理カウンセラー、小児科医による健康や教育に関する勉強会も開かれました。陶芸や絵画などの教室、スポーツ大会、野外で行われる催しに親子で参加して楽しみました。親自身が病気である家族のグループも、ホールがんの子どものいる家族のグループも、まったく分け隔てなく、参加者たちは大人も子どももみなとても親しくなり、いつも一緒に過ごしていました。ナデジダの職員たちからも、みな大変仲が良く、お互いにいろいろなことで協力し合っている、とても雰囲気の良いグループだったと伝えてきました。

~保養に参加した8家族~

<母親または父親が甲状腺手術を受けた家族>

★イリーナ(37歳)甲状腺手術後、ホルモン剤服用。甲状腺機能低下症。娘ウリヤーナ(12歳)免疫力が低く、病気にかかりやすく治りにくい。

★オリガ(39歳)甲状腺手術後、ホルモン剤、 カルシウム剤を服用。脊椎の骨軟骨症。息子コー リャ(7歳)息子ナザール(5歳)二人とも免疫 力が低く、病気にかかりやすく治りにくい。

★イリーナ (33 歳) 甲状腺手術後、ホルモン剤 服用。甲状腺機能低下症。娘アンナ (8 歳) 気管 支喘息、アトピー性皮膚炎。

★アレクサンドル(37 歳)甲状腺手術後、ホルモン剤服用。妻ナターリヤ(37 歳)娘イーラ(7歳)息子ディーマ(5 歳)病免疫力が低く、病気にかかりやすく治りにくい。

※イリーナさん(33歳)とアレクサンドルさんは子どもの頃、ナデジダで行われた子ども基金主催の「甲状腺手術後の子どもの保養プロジェクト」に参加していました。

『2023年チェルノブイリ救援カレンダー』1月と12月の写真は、この保養に参加した家族です。



<小児がんの子どもとその家族>

★カリーナ (9歳) 骨盤の横紋筋肉腫 母親エレーナ (38歳)

妹エセーニヤ(5歳)心臓の発達異常

★ボグダン(11 歳)後腹膜神経芽細胞腫 母親ナターリヤ(41 歳)脊椎の骨軟骨症 父親アレクセイ(41 歳)

★ワルワーラ (7歳) 急性白血病 母親アンナ (33歳) 甲状腺腫 兄イワン (13歳)

★ミーシャ (8歳) 両眼網膜芽細胞腫 母親マリヤ (33歳)

※この4人の子どもたちは日本の里親から支援を受けています。

*** 参加者たちの感想 ***

- ●私は普段頭痛と疲労感があり、子どもは気分の むらやだるさがあり、食欲があまりありません。 私は保養のおかげで頭痛が消え、力が沸きました。 子どもは活動的になり、食欲が出ました。
- ●娘は普段元気がなく、咳がよく出て発作を起こすこともあります。保養を通してより活発になり 顔色がよくなり、咳はほとんど出ませんでした。 素晴らしい保養の機会をいただき感謝しています。
- ●1991 年と 1993 年の 2 回、甲状腺の手術を受けました。慢性的な頭痛、手足の痙攣、心臓の頻脈があります。すぐに不安を感じるなど、気分にむらがあります。ナデジダのスタッフはみな優しく気遣ってくれました。素晴らしい治療と食事、子どもにも大人にも楽しいプログラムのおかげで私も子どもも体調も気分もよくなりました。日本のみなさん、ほんとうにありがとうございます。



- ●娘は生まれつき心臓の異常があり、息子は風邪をひきやすいです。おいしい食事、快適な環境、さまざまな催し物など、家族全員にとって素晴らしいものでした。日本の皆さんに心より感謝します。
- ●食事、住環境、周りの自然、医療、催し物、スポーツ施設、丁寧な対応をしてくれるスタッフのみなさん、すべてが素晴らしかったです。またここに戻ってきたいです。家族全員、体調、気分が良くなりました。
- ●息子は腫瘍病で、免疫力が低く、よく風邪をひき鼻炎が長引きます。ナデジダ全体のあたたかい雰囲気、治療、食事などすべて素晴らしく、帰りたくないと思うほどでした。このような幸せな思い出ができたことに感謝します。息子は重い病気ですが、彼がいることは私にとって人生最大の幸せです。この子のおかげで私たちは強くなれるし、大きな愛を受け取っています。
- ●すべてが素晴らしかったです。スタッフはみな前向きで思いやりにあふれ、信念をもって働いていると感じました。おいしくて栄養のある体に良い食事、素晴らしい自然環境のおかげで、子どもたちも私も十分に休養し、たっぷりと充電することができました。思いやりのある日本のみなさんのおかげで、素晴らしい場所で過ごすことができたことに深く感謝しています。
- ●みなさんのおかげで、私たちは素晴らしい保養をすることができました。みなさんの思いやりに心からお礼を申し上げます。子どもたちの健康が一番大事です。子どもたちの顔から決して笑顔が消えることがないように祈っています。子どもたちにはどんなことがあろうと幸せであってほしいです。



放射能汚染地域に住む病気の子どもたちのための保養 2022年夏 ベラルーシ

医療・教育・心理ケアの 3 本の柱によって組まれた「ナデジダ」の保養プログラムは、放射能汚染地に住んでいる病気の子どもたちの心身の健康回復に大変効果があると評価されています。昨年に続き今年も事務局スタッフは現地訪問ができませんでしたが、保養開始から最後まで、「ナデジダ」のスタッフと引率者たちからは写真を交えて子どもたちの様子が随時、事務局に伝えられました。

■場所:子どもリハビリ・健康回復センター 「ナデジダ(希望) | ベラルーシ・ミンスク州

■期間:2022年8月3日~8月26日(24日間)

■参加者:子ども24人(8~17歳/ゴメリ市、ゴメリ地区の村、レチッツァ市、ドーブルシ市、モーズィリ市、)、引率者2人

■参加者の病名:腎臓がん、肝臓がん、目の腫瘍、 脳腫瘍、後腹膜神経芽細胞腫、悪性リンパ腫、精 巣がん、卵巣がん、リンパ管腫、線維肉腫、出血 性脈管炎、血小板減少症。

(これ以外に、心臓の異常、脊柱側弯症、慢性胃炎、気管支炎などの疾患の子どもを含む。)

●マリヤ・L (小児科医)

参加した子どもたちはみな、手術、化学療法、放射線治療などを受け、体の免疫力が低くなっています。健康を回復するために、療養治療を受け、栄養のある食事をとり、適度に体を動かすことが必要です。到着後の最初の健診により、それぞれの体調にあった治療が決められます。新鮮な野菜を多く含んだ栄養バランスのとれた3度の食事のほか、3度の軽食(ヨーグルト等の乳製品、果物、ビスケットなど)が提供されます。午前中はそれ

ぞれが決められた治療(マッサージ、シャワー療法、運動療法、アロマテラピー、心理カウンセリング、酵素カクテル、薬草茶など)を受け、午後はクラブ活動(陶芸、絵画、手芸、ビーズ細工、木工細工)やいろいろな催し物に参加しました。

最終日に行ったアンケート結果ではほとんどの子どもが、保養に来る前よりも体調がよくなったと答えました。滞在中は良い天気が続き、森や湖など、自然の中で過ごす時間が多かったことも、よい効果をもたらしたと考えます。

●ナタリヤ・A (教育担当:教育者の資格をもった職員で、滞在中の生活全般の世話をする)

参加者たちの多くは以前にナデジダに来たことがありましたので、環境にすぐ慣れてのびのびと過ごすことができました。グループの中で年齢差が大きかったのですが、みなとても仲が良く、何事にもお互いに助け合い、大きな家族のようでした。センター全体の催し物にも積極的に参加しました。それぞれ健康に問題があるにもかかわらず、体を動かすような催し物にも積極的に参加し、健康な子どものグループに引けを取らない活躍をしました。施設内の遊具(ブランコ、滑り台、ジャ





ングルジムなど)でよく遊びました。またアスレチック公園【ドイツの NGO により、施設に隣接する林の中に2019年に開設】では、ヘルメットと安全帯を着けて空中のロープをつたうなど、仲間と協力し楽しみながら難しい課題に取り組みました。これらのことはみな、健康回復に良い影響を与えたと思います。環境問題を考える教室も開かれ、自然エネルギーや、プラスチックごみの再生などについて学びました。最終日の発表会では、舞台上で歌や踊り、詩の朗読など、練習してきた成果を披露しました。子どもたちはこの保養を通し、新たな自分の能力を発見し、前向きな気持ちになりました。アンケートですべての子どもたちが「またナデジダに来たい!」と答えました。

●リーディヤ・S (保養プロジェクト担当職員)

期間中に一度も雨が降らなかったおかげで、子どもたちは多くの時間を自然の中で過ごすことができました。はじめ引率者たちは子どもたちが風邪をひいたりすることをとても心配していました。しかし今年の保養期間中は、誰一人として病気になりませんでした。これは素晴らしいことでした。最終日には、家に帰りたくない、友だちと別れたくないと涙する子もいました。

ベラルーシの子どもたちのために保養プロジェクトを続けてくれている日本のみなさんに深く感謝しています。これは子どもたちの健康回復にとても大事なことです。

<子どもたちへのアンケート>

*項目により複数回答。【 】は添えられたコメント。

1. ナデジダでの保養は楽しかったですか?

「はい」 (24人) **何が楽しかったですか?** 「自分の家のようにくつろげた」「興味のあること、健康に役立つことがたくさんあった」「多くの友だちがいる」「自然が美しい」「スタッフが優しい」 2.ナデジダにまた来たいですか?

「はい」(24人)

3. 保養の前後で健康状態に変化はありましたか? 「よくなった」(20人)「特に変化なし」(4人) 4. グループの中での居心地はどうでしたか?

「いつでも快適だった」(20人) 【みんな仲が良かった。お互いを尊重し合った。いつも楽しかった】「その時によっていろいろ」(4人) 【時々喧嘩をしたが、そのあと仲直りした。】

5. 一番楽しかった出来事は何でしたか?

催し物への参加(12人)、ダンス、ディスコ(15人)、舞台で演じたこと(10人)、スポーツ(3人)クラブ活動(14人)環境問題の教室(5人)自然の足裏マッサージ(21人)

6.食堂の食事に満足しましたか?

「はい」(20人)「その時によっていろいろ」(4人)

7. ナデジダで学んだ健康的な生活習慣をこれからも続けますか?

「はい」(24人)

8. 自分の健康について誰が一番気を付けるべきだと思いますか?

「自分自身」(24人)、「自分自身と、両親、医師」(5人)





ベラルーシからのメッセージ

「欧州最後の独裁国家」とも呼ばれてきたベラル―シは、2020 年大統領選挙後の国家権力による暴力、そして今般のロシア軍のウクライナ侵攻への協力により、日本を含む各国から厳しい経済制裁を受け続けています。基金から現地支援団体への送金も常に綱渡りを強いられており、不安は尽きません。しかし、チェルノブイリ事故で国土の多くが被災したベラル―シには、今も被害に苦しむ人々が数多くおり、そうした人々を支援しようとする個人や組織が厳しい条件の中でも何とか活動を続けています。ベラル―シには、歴史的にも非常につながりの深い隣国ウクライナに親類や友人を持つ人は珍しくなく、いま多くの人が国境線の向こう側での出来事に悲痛な思いを募らせています。子ども基金では、可能な限りベラル―シのチェルノブイリ被災者たちへの支援を継続していきます。

◆子ども健康回復センター「ナデジダ」 マクシンスキー所長より

ベラルーシとドイツの共同慈善企業「ナデジダ」は、2022 年 7 月 28 日で正式登録から 30 周年を迎えます。 チェルノブイリ原発事故により被害を受けたベラルーシの子どもたちのための健康回復を目的として設立され、現在も運営が続いています。

チェルノブイリ事故により放射能の影響を受けた地域の学校からの子どもの受け入れは、国の保養プロジェクトとして進められてきました。現在さらに、療養治療の必要な子どもに親が同伴する保養、脳性まひの子どもに親が同伴をする保養、という 2 つの国の保養プロジェクトも行われています。また世界中の 30 を超える NGO と協力し、血液疾患、甲状腺などさまざまな病気の寛解期の子ども、保護者またはボランティアが同伴する発達障害のある子ども、貧困家庭の子ども、孤児院の子どもたちの保養プロジェクトを行っています。国内外の NGO、公的機関、個人の努力と、国の参加を得て、ナデジダでは他に見ないさまざまなプロジェクトが行われ、これまでに 13 万人以上の子どもと大人を保養に受け入れてきました。

1992 年から現在まで、チェルノブイリ原発事故の教訓をもとに、自然環境に負荷をかけない運営を目指しています。その一つとして、再生可能エネルギーに注目し、2017 年 8 月に 600 kW の容量を持つ太陽光発電所の運転により、エネルギー資源の 95%を提供しています。2019 年には、ベラルーシで唯一の本格的なフィールドアスレチック公園を開設しました。専門家の指導の下、子どもたちは楽しみながら体を動かしています。これらはすべてナデジダの支援者たち、国内外の NGO パートナー、友人の皆様のご支援のおかげで可能となりました。

ナデジダは海外の NGO との連携を常に維持し、相 互理解のために合同会議を開催し、経験を交換して います。しかし 2020 年から 2022 年はナデジダにとっ て大変な年になりました。世界的な COVID-19 感染拡 大や、困難な社会的状況により、国内外のNGOと共同で計画したことの多くを延期せざるを得ませんでした。

長年にわたりナデジダのプロジェクトをご支援いただいているすべてのみなさまに感謝しています。これからもお互いに協力し、様々な問題に対する新たな解決の道を探しながら、共通のプロジェクトを進めていきましょう。

◆ウクライナに親類のいる K さんより

ゴメリ州に暮らす K さん (60 代男性) の娘は、10 代 の頃に甲状腺の手術を受けました。体調が回復してから、夏には娘を連れてウクライナの海に保養に行っていたそうです。

私の弟(68歳)は、妻とともにポルタヴァ(ウクライナ中部)の家に留まっています。空襲警報が鳴ると家の地下に隠れています。オデッサ(オデーサ)に住んでいた彼の息子は、自分の家族をウクライナの西部へ避難させました。彼はウクライナ軍に従軍していますが、いま連絡がとれません。娘は一時キエフ(キーウ)から西部の町へ子どもを連れて避難しましたが、今は自宅に戻っています。彼女の家は被害を受けませんでしたが、近くの住宅や家屋はひどく被害を受けました。

私の妹(63歳)は、夫、子ども、孫たちとともにボロジャンカに住んでいました。町は完全に破壊されています。爆撃と戦闘があった時、ガレージの中に掘った穴の中で水も食料もない中、2週間過ごしました。その後家族はウクライナの西部に避難し、今はスウェーデンに避難しています。ストックホルムに1部屋のアパートを割り当てられた他には、何の社会保障もありません。カードに振り込まれるウクライナの年金で暮らしています。私たち家族は常に彼らと連絡を取り合い、できる限りサポートしようとしています。毎日祈っています。私たちの心は彼らと共にあります。(8月5日)

交生や若者の原告らが切々と訴えた 311 子ども甲状腺がん裁判

甲状腺がんは原発事故とは関係ないと主張する 東電に対する法廷での闘いが始まっています。

(この裁判の目的や意義については、子ども基金 News122 号の井戸謙一弁護団長の講演記録をご覧くだ さい。)

5月26日、第一回口頭弁論が東京地裁で行われ、 20 代女性の原告が陳述しました。原発事故当時中 学3年だった彼女は、高校で甲状腺がんを発症し 手術。それでも努力して大学に進学したのですが、 再手術と過酷な放射線治療のために中退を余儀な くされたのです。

9月7日の第二回弁論では、13歳で手術し17歳 となった今年、2度目の手術を受けねばならなか った高校生の原告が陳述し、「自分の考え方や性 格、将来の夢も、まだはっきりしないうちに、全 てが変わってしまいました」と語りました。

甲状腺がんを手術した福島の子どもたち 237 名 の多くは、差別を怖れ今もひっそりと暮らしてい ますが、勇気を振り絞った 2 人が公的な場で自分 の哀しみと社会への願いを切々と訴えたのです。

(2人の肉声による陳述は「311甲状腺がん子ども 支援ネットワーク」のHPで聴くことができます。

(https://www.311support.net/news)

《東京電力の主張と弁護団の反論》

しかし東京電力は被告答弁書で、原告らの甲状 腺被曝線量は健康リスクの上昇が認められている 100mSv には遠く及ばないとし、甲状腺がんと被曝 との因果関係を否定しました。それに対し弁護団 は、①小児甲状腺がん増加が認められるのは甲状 腺等価線量何 mSv からか? ②原告らは①で想定さ れる程度の甲状腺被曝をしていないのか? ③福島 の県民健康調査の結果をどう評価するか? の三 つの論点で法廷闘争を進めています。

9月7日の第二回口頭弁論で井戸弁護団長は科学 的根拠をもとに精緻な反論を展開しました。まず 東電のいう 100mSv は実効線量で、被告の主張は根 本的に誤っていると指摘。「小児甲状腺がんに罹 患した子どもの中で、甲状腺等価線量が 10mSv 以 下の子も約 16%いる」というウクライナのトロン コ教授※によるデータを示し、低い甲状腺等価線 量によって発症することを立証しました。

②については、原告らの甲状腺等価線量がわか らないのは調べなかった国の責任であると主張。 その上で東電が主張する原告らはそれほど被曝し ていないという 3 つの論拠を科学的に批判しまし た。その一つが原発推進寄りの国連科学委報告の 被曝線量推定ですが、その報告でさえ「胎児から 5 歳までの女性については、推定被曝線量から 16 ~50 症例程度の甲状腺がんが放射線に起因すると 推測され得た」と記していることを法廷で明らか にしたのです。

そして③については、東京電力は、死に結びつ くことがないがんを多数診断したという「過剰診 断論」に立つのか、そうであれば原告らの甲状腺 がんも過剰診断なのか、を次回に問うと井戸弁護 団長は語っています。

《裁判の今後と支援の重要性》

第三回口頭弁論は11月9日、第四回は1月25日 です。東京地裁裁判長は、原告の陳述を3名で打 ち切るとし、それに抗議する署名が広がっていま す。そして弁護団は今後、次の 4 点を主張・立証 するとしています。 1. 低線量の甲状腺被曝でも甲 状腺がんに罹患し得る。2.福島の子どもたちの甲 状腺被曝量は国連科学委の推定より多い。3.県民 健康調査で確認された甲状腺がん患者の発症原因 は被曝である。4. 疫学的な検討から福島の小児甲 状腺がんの原因は被曝しか有り得ない。

この裁判が報道される中で、8月に20代の方が 新たに原告に加わり、原告団は 7 名となりました。 しかしこの裁判はまだ広く知られていません。5 月に TBS「報道特集」が取り上げると「デマだ」 との激しいバッシングがなされ、大手メディアは 腰砕けになっています。原発再稼働を進め、新設 をも企む政府や電力会社にとって、原発事故が甲 状腺がんを引き起こした事実は何としてでも隠蔽 しなければならないのです。

私たちはこれまで原発をつくりその電力を享受 してきた大人世代の責任として、甲状腺がんの子 どもたちを支え、この裁判の勝利まで共に歩みた いと思います。最新情報は「311甲状腺がん子ども 支援ネットワーク」のHP をご覧ください。

2023年 チェルノブイリ 37 周年救援カレンダー

これまで救援カレンダーは、事務局スタッフが現地を訪問の際に撮影した写真で制作をしてきました。しかし 2019 年からコロナの影響により、さらに 2022 年 2 月のロシアのウクライナ侵攻により、現地へ行くことができなくなっています。そのため 2023 年のカレンダーは、ベラルーシの保養施設のスタッフが撮影した今年 (2022 年) の保養の写真と、これまで保養をしたベラルーシとウクライナの子どもたちの写真で構成しました。カレンダーの表紙は 2010 年にクリミアのサナトリウムで保養をしたウクライナの子どもたちです(本号 1 頁参照)。4 年後の 2014 年 3 月にクリミアはロシアに併合されました。その年の夏からはザカルパチヤ州の山岳地方で、そして 2016 年夏からはヘルソン州の海辺で昨年まで保養を行ってきました。

表紙のウクライナの子どもたちは現在、20 代前半から半ばという年齢です。 大学生もいれば、結婚して子どもがいる人もいます。学校の先生になっている 人、デザイナーの仕事をしている人、歯科医師を目指して学んでいる人、大学の ジャーナリスト学科を卒業した人などもいます。当時、この子どもたちの保養に

> 同行した地元の小児科医エレーナさんは今でも 彼ら、彼女らと連絡を取りあっていて、成長し た子どもたちの写真を送ってきてくれました。

小さかったあの子が、この子が、こんなに成長していました。この輝くような笑顔の若者たちが平和に暮らせるようになってほしいと強く願います。

カレンダーの収益は、チェルノブイリと福島の原発事故により被災した 子どもたちの救援金にあてられます。2022 年版の収益は 62 万円でした。 場所をとらないコンパクトなサイズです。ご自宅で、職場で、またご友人な どへのプレゼントにもぜひご活用ください。ご注文をお待ちしています。









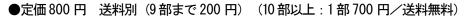
昨年の保養に参加した

子どもたち(カレンダー

7・8 月の写真) につい

ては8頁をご覧くださ

い。



●お申し込み方法: Fax 、E-mail または郵送でお申し込みください

●お支払方法:お届けするカレンダーに同封の郵便振替用紙でお振り込みください。

●カラー、サイズ:縦30 cm×21 cm (見開き A4 サイズ)

●撮影:チェルノブイリ子ども基金 佐々木真理(※表紙/2・4・5・9・10月の写真。その他はベラルーシ「希望」とウクライナ「子どもたちの生存」提供)

●デザイン:川島進デザイン室

●発行・制作:チェルノブイリ子ども基金



****** 募金·救援状況 ******

●募金状況 2022 年 6 月~9 月 (単位:円)

	6月	7月	8月	9月
募金件数	64	130	54	15
救援寄付金	299,000	1,388,508	469,138	1,211,550
保養費	25,000	143,000	17,000	3,000
里子支援	19,260	1,244,160	70,580	190,670
ウクライナ支援	247,500	541,634	211,986	17,000
ニュース購読費	23,000	58,000	14,000	2,000
合 計	613,760	3,375,302	782,704	1,424,220
ツノロ 「+ + の を	5白っ じょせん	ヘ L 北 L ロフ(エンイナカロタロ

※7月「未来の福島こども基金」様より70万円、9月「生活協同組合パルシステム東京」様より「平和カンパ金」115万4,550円のご寄付をいただきました。

※その他、切手、葉書のご寄付をいただきました。

●救援状況 2022 年 6 月~9 月	(単位:円)			
<ウクライナ>				
緊急支援 甲状腺の病気の若者たちへ	192,753			
<ベラルーシ>				
◎困難の中の子どもたちへ希望を				
里子支援(半年分 x 46人)	1,659,028			
緊急支援(半年分 x 9人)	347,238			
◎子どもリハビリ・健康回復センター「希望」				
「家族保養」「子どもの保養」往復の交 通費 (バス)	301,946			

* * * 販売品 * * *

- ◆マトリョーシカのマグネット、
- マトリョーシカのキーホルダー 各500円
- ◆ベラルーシ製リネンクロス
- サイズ 49cm×70cm 800 円
- ※送料別(実費)子ども基金HPに画像を掲載しています。

♥ 団体名一覧 ♥

(順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させて いただいております。ご寄付をいただ いた みなさまに心よりお礼を申し上 げます。

【7月】

ピースライブインこうち、広島合唱 団・ナッパーズジョイントコンサート 実行委員会、イエス・キリスト教会 祈りの家、未来の福島こども基金

【8月】

チェルノブイリ子ども基金・横浜、 広島合唱団・ナッパーズジョイントコ ンサート実行委員会、日本キリスト教 団 奥中山教会、日本キリスト教会 横浜桐畑教会

【9月】

生活協同組合パルシステム東京

~みなさまからのメッセージ~

- ●いつも通信をありがとうございます。チェルノブイリの子どもたち、今、 大変な中でも明るく希望を持ち続けて下さい。(0 さん 東京都)
- ●News No. 122 に感じ入りました。今、 レバノンの里子たち家族も高インフ レ下で苦悶中です。僅かですがカンパ です。(M さん 兵庫県)
- ●ニュースを知人にコピーして送りました。スウェーデンの NGO とコンタクトがとれて本当によかったですね。 (T さん 東京都)

★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

- (1)郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金
- (2)ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキュウ店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリコドモキキン

(3)三菱UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金





事務局から

■「チェルノブイリと広島の叫び 絵画展」11月15日~20日(10時~17時)名古屋市民ギャラリー栄 第4 展示室 入場無料 主催:<非核・平和>を求める写真絵画展事務局 Tel/0561-58-7568

■「基金ニュースレター」について

ご寄付をくださった方に、使途の報告としてニュースレターをお送りしています。ニュース購読費(2,000 円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

※ニュースレターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。

※ニュース発送経費を節約し、なるべく多くのお金を子どもたちの保養や医薬品に活用したいと思います。 そのため長期間、募金・カレンダー購入などのお振り込みがない方へのニュース発送は停止とさせていただきます。事情をご理解いただけましたら幸いです。

■ボランティア募集

ニュース発送作業(年3回:2·6·10月):お手伝いいただける方を募集します。次回は、2023年2月中旬の予定です。感染対策のため日程・定員が流動的ですので事務局へお問い合わせ下さい。

場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10 階)

※参加ご希望の方は、前日までにメールかお電話で ご連絡ください。電話は平日午前 10 時~午後 5 時。 留守の場合は伝言をお願いします。

★編集後記★

前号で紹介したサビーナさんは、避難先スペインで一時滞在許可を取得してウェブデザイナーの 仕事を見つけ、一緒に避難した仲間たちと助け合って無事に暮らしているとのことです。今号編集中には、ベラルーシとウクライナ、ロシアの人権活動家と団体にノーベル平和賞が贈られることも報じられました。国連総会ではロシアの一方的な「併合」に対し圧倒的多数の非難決議が採択され ** **ご協力いただいているみなさまへ** ** 振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

<u>払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で</u> ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で受領確認の連絡をご希望の方に、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収証がご入り用の際は振込用紙の該当欄に印をつけてください。

ています。一方でウクライナ全土には大規模なミサイル攻撃が再び加えられました。希望と不安が 交錯する毎日ですが、次号をお送りするまでに事態が好転しているよう、ただ祈るばかりです。

「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と 偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国 際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。 われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏 から免れ、平和のうちに生存する権利を有するこ とを確認する。」(日本国憲法前文)この一文を いま一度深く噛み締めます。



●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行● 住所 〒177-0041 東京都練馬区石神井町3-16-15-408

Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp ◇ウェブサイト http://ccfj.la.coocan.jp/

◇事務局ブログ http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。

